日本古代における女性の恋愛観
―『万葉集』の女性歌人を中心に―
Ancient Japanese Women's Attitudes towards Love: Concerning on Female Poets In *Manyoshu*

台湾大学日本語学科
修士二年
時 新昊

要旨

『万葉集』は日本に現存する最古の歌集であり、天皇から一般庶民まで、およそ514名の歌人が詠んだ4500首の和歌を収めている。その中に、114名の歌人が女性である。数こそ男性歌人に及ばないが、決して少ないとは言えない。また、女性歌人の和歌のうち、自分の感情に関する歌が多いということが注目すべきだと思われる。

佐藤太平氏が「戀歌が當時の若い男女には缺くべからざる武器であつた」(「日本民族恋愛史」『複刻日本女性史叢書・第13巻昭和期』、クレス出版、2008年）と指摘した通り、恋を歌う和歌は大きな役割を果たしている。その一方、折口信夫氏は日本の初期の恋歌が「恋愛の実感から出て居るものではな」く、ただ万葉人の「強い性の自在を欲する潜熱に、古代人の生活の激しさ」(「古代生活に見えた恋愛」『折口信夫全集1』、中央公論社、1995年）にすぎないと論述した。

『万葉集』における女性歌人は、皇后や女王などの貴族だけではなく、防人の妻のような一般人もいる。これらの和歌の分析を通して古代女性の恋愛事情や恋愛観を垣間見ることができると思われる。そこで、本報告は女性歌人が自分の恋愛心理を表した和歌に焦点を当て、全般的な特徴を把握したうえ、女たちがその中に託した憧れや辛さ、苦しみなどの感情を捉えながら、古代女性の恋愛観を究明してみたい。